

## 「就学前教育のあり方」意見交換会レポート

令和3年3月9日(火)に就学前教育支援センターにて、教育委員会が主題「生涯の基盤を育む就学前教育の充実」として実施した、教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価において、お力添えいただいた学識経験者のお二方を迎えて、新教育ビジョンの策定を見据えたこれから10年の就学前教育のあり方について意見交換会を行いました。

《お越しいただいた学識経験者》

國學院大學人間開発学部子ども支援学科 神長教授

杉並区教育基本振興計画審議会会長・東京大学大学院教育学研究科 牧野教授

### 1 講話 「成田西子供園見学の感想」「これから10年の幼児教育において大切にしたいこと」

神長教授

- ・成田西子供園の5歳児は、見通しをもち、一人一人が意志・目標をもって生活していた。子ども自らが遊び出し、生活できるように、子どもの発達に応じた教材研究がとても丁寧に行われていた。
- ・10年後は福祉の施設にもしっかり幼児教育を根付かせる施策が進んでいる。しかし、実際には保育施設も様々で、教育環境を整えた幼児教育についてはあまり考えていないといった施設もある。公立も私立も、幼稚園も保育園も小規模保育施設にも子どもたちの発達する力を伸ばしていく幼児教育の大切さを伝えていかなければならない。

牧野教授

- ・成田西子供園を見学して、小学校では先生が上から見守り、管理するという面があるが、幼稚園では先生が子どもと同じ目線に立ち、子どもたちとの関係を作っていることが印象的だった。
- ・今回の要領改訂で就学前教育から高校までの学びが一貫され、人生100年といわれる時代の初期の学校教育のさらに初期を就学前教育が担うこととなった。子どもたちには、生涯学び続ける力の基礎を身につけることが期待されている。
- ・将来は、家から出て仕事をするというよりも、日常生活の中にも働くこと、学ぶことを位置づけていくようになっていくと考えられるため、子どもたちは、自分を律する力も身に付けていかなければならない。



### 2 意見交換(主な質問と回答)

Q 日々の保育の中で、家庭での教育力の向上に向けて、子供園としてどのように家庭に働きかけていくべきなのかアドバイスをいただきたい。

A 神長教授

昔の保護者も子育ては初めてのことで分からないことだらけだった。今の保護者の子育てがどうということではなく、園も保護者も一緒になって成長していくと考えることが大事ではないか。日々の保育の中の各園の実践の発信と子どもの育ちを丁寧に伝えていくことが家庭での教育力向上につながっていくのではないかと。

牧野教授

現代の保護者は、周りから常に評価されているという面がある。自立ということが頼ってはいけないと解釈さ

れがちだが、孤立することとは違う。いいか悪いかではなく、見ていてあげるから大丈夫という関係、なんでも言い合える関係が家庭と築ければよいのではないか。

Q 地域との協働をする上で、私たちが心掛けるべきポイントがあれば教えていただきたい。

また、有効な実践事例があればお話をうかがいたい。

A 神長教授

地域とのつながりは、これまでの各園での人とのつながりにより生まれてくるものなのでこうやればよいというものはない。「学校関係者評価」の取組みで地域の代表が参加することになり、それをきっかけに広がっていったということをよく聞く。各園の人とのつながり、財産を見直し、出会いを大切にし、園の大事にしていること伝えながらやっていくとよいのではないか。



牧野教授

地域、園、家庭のどこかに負担がかかるのはよくない。自分が関わったお母さん向けセミナーでは、当初は集まりが悪かったが、続けていくうちに Twitter などでも人が集まり、親同士がつながっていった。そういった孤立している人をつなぐような場を作ることが大切ではないか。

Q 若手職員にとって、より効果的な園内研修・園内研究のあり方や進め方について教えていただきたい。

A 神長教授

私の科学研究で、私立園を対象にアンケート調査を行ったところ、若手職員は園内研修の充実よりも少し上の先輩職員に話を聞きたいと思っていることが分かった。園内研修では、内容が高尚になると若手職員は質問や発言が少なくなってしまうが、それは意欲がないからではない。ミドルリーダーや先輩職員が話しやすい場を作る工夫が必要である。基本は保育を見合いながら環境がどうだったか話しやすくすることだが、事例の持ち寄りを写真だけで話し合うと参加しやすくなる。園内研修は最終目標を定めて 2, 3 年位の長いスパンをもって考えていくとよい。

Q 平成 30 年に改訂された保育所保育指針の中で、幼児教育の積極的な位置づけがなされ、解説書には「幼稚園教育要領との整合性を図った」とあるがどのようなことなのか。保育園で行う日々の保育の中では、何か変わってくる部分があるのか教えていただきたい。

A 神長教授

保育における養護と教育の一体化には深い意味がある。かつての幼保一元化の議論には、学校教育と一緒にすることはできないということが根底にあり、養護と教育の一体化と言われてきた。保育施設の増加や少子化による危機感により、保育園だから学校教育が受けられないとは言えなくなってきたことが契機となり今回の保育所保育指針改定が行われた。養護と教育の一体化というよりは、保育園が福祉の中でいかに幼児教育を充実させるかが示されていることが大切である。特に5歳児は、福祉と学校教育の壁を払って、10の姿を理解することが大切である。

牧野教授

2030 年には、現在の仕事の5割が自動化されて人を雇わなくなると予測されている。また、今の中学校1年生は平均で 107 歳まで生きると予測されている。そのような中で、生涯にわたって学び続けるための基礎を作ると考えると幼児教育の重要性が分かる。子どもたちを評価するのではなく、子どもたちが探求していくのに寄り添って、一緒に発見し、一緒に驚き、一緒に喜ぶことが、先生に求められているのだと思う。